校長研修だより９０

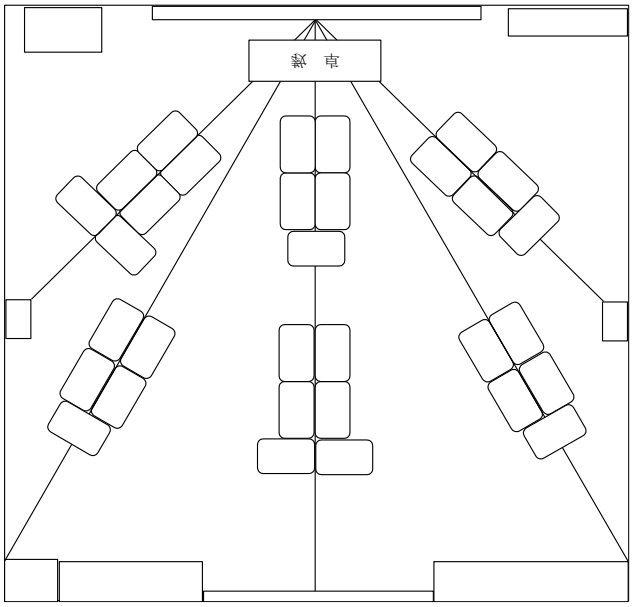
仏作って魂入れず

２０２３・１・１８　　重枝 一郎

一般的に「組織」というと，いわゆる「組織図」で表される。いくつかの「部」の下に「課」があり，全体で見ればピラミッド型を形成しているといった類のものである。だが，それだけだと「仏作って魂入れず」であり，私の経験からも，描いた図通りに機能するとは限らない。そのカギを握るのは，最小単位である数人のチームの関係性になる。この考えは，前に書いた「マスターマインドグループ（校長研修だより 76 号）」につながる。わかりやすく言えば，メンバーが笑顔か仏頂面かによってだけでも場の雰囲気は違ってくる。

さて，私が以前行っていた学級経営について話す。私が話すと「それは公立学校のやり方」と思う先生もいるかもしれないが，はっきり言ってこれまで私が話してきたことに公立も私立もない。もっと言えば，本校の学校文化（大切なひとり）をリスペクトした考えのもと発信しているつもりである。

もう 20 年以上前になるが，当時の私の「学年だより」から抜粋（3 年後に学校全体の形となる）する。



○班形態をいかした学習

本年度は，左図のように班を作って集団づくりに力を入れていこうと考えています。しかしながら形だけでは集団づくりにはなりません。そこで日常のすべての教育活動でいろんな取り組みをしていこうと考えています。その取り組みは学年だよりで紹介していくつもりです。

この班形態をする理由として

①自学自習の力との関係について

班形態での学習になると，「助け合い学習」を行いやすい。そうなると必ず「自学自習の力」がつきにくいという面を言う人がいる。その克服のためには「一人で問題を解く時間」「他の班員と相談をして，教え合う時間」を明確に区別する必要がある。学習規律とも関わってくるが，ルールとマナーを徹底させる必要がある。これはソーシャルスキルの向上にもつながる。ちなみに，居眠りや聞いているふりをする生徒は減少する。

②学習規律の面について

列の状態よりも班形態の方が隣の生徒との距離が近いため，より話をしやすくなり，授業中の態度が悪くなる（私語が増える）という人がいる。しかし，学習規律については班の形態であろうが列であろうが同じように考えて良い。また，班長をリーダーとし

て育成することによって，生徒同士の中で自治活動の意識を高めていくことができる。

③班の配置について
　先図のように班を作っている。特徴的な部分は左右の班が黒板の中心に向かって，斜めに作っているということ。これによって横向きの生徒も 90 度横を向けば黒板に正対できるように配慮している。もう一つは，６人班の時に，後の二人が前を向いているということ。３人の生徒が横並びになると，隣の隣の人の顔を見ることができないが，この状態だと全員がお互いの顔を見て話をすることができる。朝の健康観察もきちんとお互いの表情を見て行うことができる。また，この班の状態を維持するために，床に机の脚を置くポイントをつけており，清掃の後にも常にこの形で班を作ることができるようにしている。班の形をきれいにする（机と机の間が離れないようにする）ためには，鞄を机の横に掛けずに，後の棚の中に入れさせる。

④班の作り方（班編成の方法）について
　リーダーとして選出された６名（班長）を中心として、班長会を組織する。その班長会でクラスの実態をふまえ，落ち着いた授業が行えることを第１条件として生徒が主体的に班を決めていく。苦手な教科がある人，友達づくりが苦手な人などに対するサポートに配慮した発想を大切にして班づくりをしていく。

○班形態の基本コンセプト

　はじめはいろいろなトラブルを心配する方もいるかもしれませんが，相手の立場にたった自己表現力をつけるためにじっくり取り組みたいと思っている。
テーマ　『他者とのかかわりの中で自己を見つめ生き方を考える』
①友達の考え方や行動を参考にしたモデリング（模倣）学習。
　・観察の対象が多い。
②友達の目を通して自分についてのフィードバック。
　・自分をうつす鏡が多ければ多いほど，自分の学習への気づきが増える。
　・相互のフィードバックで人と人をつなげていく。
③自分と他人の行動や感情，考え方の違いの比較から，新しい気づき（洞察）がある。
　・認め合う集団づくり。

　一部抜粋して紹介したが，みなさんは何を感じたか？この形をしてほしいという話ではない。
　「仏作って魂入れず」のタイトル通り，形だけしてもダメだということは言える。
　私は，20 年以上前から現場での最後までこの形で生徒による自治力を育成してきた。一つの数値的結果として，ある学校では，当時不登校生が 32 名の学校が 3 年間で 0 名となり，学力的にその地区での中堅校がトップになった。その結果で，県の市民教育賞をいただくことになった。
　おそらくこれを始めた動機は，「今の教育の頭打ち感」「生徒に対してもっと自分たちでやれ！」などがあったと思う。また，「これからの時代に必要な力を育む方法」という考えもあった。もっと生徒の力を引き出さないと，教師の力だけではうまくいかないと思う。